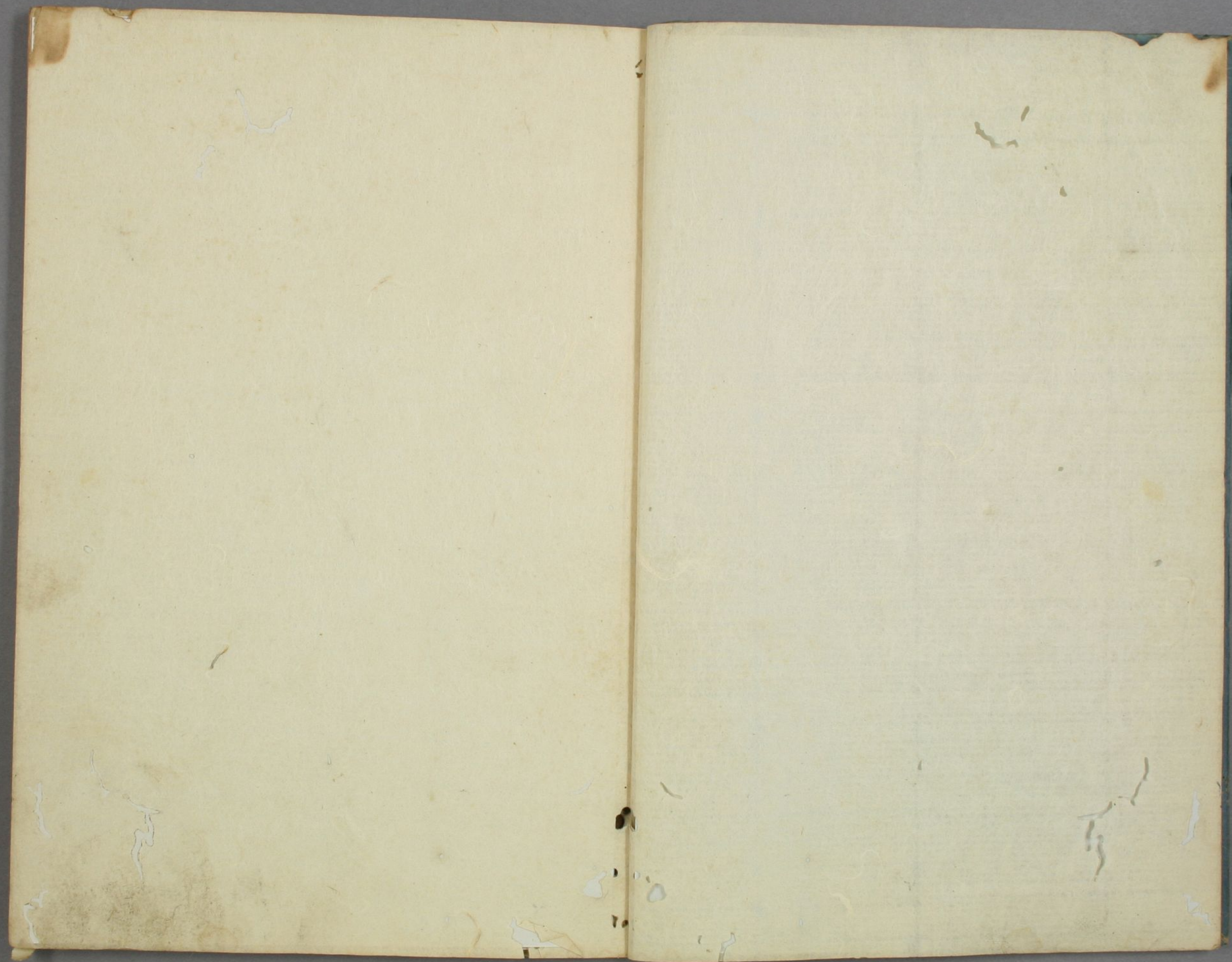


中村俊定文庫
文庫 18
280







青陽吟



百萬

坊くとと敷まきゆあやせれ年
 涎ぬらめてみもの祢つむ
 昼くもる物おまむもた起日よ
 鮫衣ひらののけてる月
 行燈の火勢ふうく唐か
 鳴子ゆき牧ちりし松板

千住くろきもかき角田川
くつれく額よもこの俳名
何そくともくふそて口語ん
後家哉は家脚錦まき音
河水の足認めれて凍したよ
砂粒と笑るる瓜のつこふさ
御殿山廿ふ秋れ折も来む
高枕笠の下り新夕之

あひちり二階てねがる櫻摘第
袋よ入て一層も下り第
煎茶哉一度は吞て花の雲
窓手のくく種かどむじ
標の幕かろまゆくと春れ梅
五人のお化け又人白老
紙子もそむむるまぬの土用平
ちちれな友をぬらす素麺

海士の花ふす。おんくも聞一りり

せむ和布のやうな百合の花

あまのついでに詠はれぬ物あり

あつて死かき吉原の交

土^ト登^{サン}りて七ッ入ッる大むさし

小手搦當て刃おはふおれ

水多れ涙おけてまじり泥の自

あろぬら喰ひよ雪の枝打

打越へつる連袂は巻きわし

もうあつた物ばなげに押し

そこをうり赤土遺し一こま

炮^{ホウ}煙^{エン}りぬ握り詠次

花又碑ふ祿臣の習中をさす

天間^{テマ}原一切はくゆく風中

歳末章

旨源

宴餅也人々活る味の家

しとぬ事も年々わたり

順の癖様一西に紐付く

夷な事とも君はゆめを

明りさく程く吼る海乃月

浪河高くもをさる

く 木のうられく 柿多崖作リ
く 下女うゑ 襪よ 履ハ 知らぬ
く 下女うゑ 襪よ 履ハ 知らぬ
く 下女うゑ 襪よ 履ハ 知らぬ
く 下女うゑ 襪よ 履ハ 知らぬ
く 下女うゑ 襪よ 履ハ 知らぬ
く 下女うゑ 襪よ 履ハ 知らぬ
く 下女うゑ 襪よ 履ハ 知らぬ
く 下女うゑ 襪よ 履ハ 知らぬ
く 下女うゑ 襪よ 履ハ 知らぬ

まきくハ 四キハ 浩ル 山の鬼
半 品はよ 磯 出 家 塚
酒 念う 菜の 初も 遷一 初
今日 此小 松は 配ル 夕月
蚕 神 朽 爰よ 盛ハ 竹 御人
本 卦 通ハ 己 是レ 己
帝 部 不よ 磔 了レ 留一 分 女
音 々々 笑ハ 芥子ハ ち ち

耀カニユキ

邦志堂 邦乃極

七ツの款れ口祝将門

小園恙以馬込も麻と思ひて

ふうふくハ柳蔭の音

空暗く月夜の様哉と云をせ

眉ハ一まじりよ入道友

ハカよ止あ天狗おれ飛く

椽に音くく紀鳥の足跡

常の音温化ふ内せこ立よ

頬はゆめくハ鼻く付ク雲

神はとと海賊丸の管焚く

獨眼申はる 時志らむ杖

咲来よまゝのこの別志種のみ

柳に付ケル初懐紙也

喜之句

| | | | | |
|-------|-----|-----|----|----|
| 讀初は先づ | 花強や | 今朝の | ま | 文里 |
| 蓬萊や | 根引の | ねら | 糸代 | 春 |
| 玉子の | 子や | 下うら | るれ | あみ |
| 汲仕 | 泉ふ | ゆや | その | ま |
| 霞晴 | ひり | と | を | ま |
| 庭種 | く | じ | や | あ |
| 遠路 | の | 柏子 | 合 | る |
| 男 | か | と | 間 | と |
| | | | | う |
| | | | | ら |
| | | | | ぬ |
| | | | | め |
| | | | | お |
| | | | | 摘 |
| 其 | 童 | | | |
| 巨 | 淵 | | | |
| 芙蓉 | | | | |
| 里 | 松 | | | |
| 関 | 山 | | | |
| 喜 | 有 | | | |
| 玉 | 枝 | | | |

早乙女のまきき 葉集のあま葉外 雀肆
 鮎乃場等や川のこをとり 白翁
 ちねりつる高のゆせたるのま 育梧
 為ハ旭をいづつ 潜く人 欣洲
 うらむすは物をも 冥く指うふ 采舟
 常りころやまのやうしり堂 専澄
 うらむすはあまの恥を耳まら 貞馬
 梅う香や誰とそるる奥に 葉蝶
 化彩くく下女一人を 梅う香 文麟

梅咲や白いハ園と花の葉 信鳥
 梅や傳も細とあまら 宗孝
 柳うふ者のあまら 園 兩 里山
 山をれよふあまら 梅うふ 和来
 己の園ようしりもあまら 梅外 水鸞
 石巻のゆと知ぬやふさ 標梅
 八町乃川遊るく 梅うふ 南平

歳暮之句

付より棹よかけら年の雄子 旦調
 入おるいささしる日やち安日 湘波
 かつらこいしけ 蟹結成や年の冥 和交
 虫のふるまをと松の櫛笥うふ 来示
 常よ梅乃若傷せとく公孫 大國
 すく掃や室も門田の水のふ 雲帳
 羽る板の目れひりや年を育 亭午
 梅にゆく大海にうまふふ 孝山
 と浪れゆりゆく板や魚の孫 面白

玉くのまをそ荷おや江戸の市 窓雨
 雄子啼や脚まのまれ小松原 尾谷
 魁の梅よ神と折し常季能 吾何
 川舟とくは竹の葉れ脚走お 湖十
 君の代や往来もとくお人の教 志邑
 白うせよ男や年の牛車 燕市
 まちゆく花まるむく千六根 竹裏
 志まねたまふもとくの温胸睨 有佐
 冬籠 蜂のふるより是みりり 船専

まを憐一抱を幕の隅に
は宮に望ましくも一年の実
流れり年と志く正安日外
お自力二人てとを惜あり
研花や梅は物のわりとあ
季信の子は撞福や海一守
於てまをと雲路の辺やと
氏無 equal ちあふとあふ
一徳行くと此相とあふ
免毫
亭五
五雲
檜川
紀遠
鈍者
雲口
羊素
子鷹

草結いの命危延す
五六十年と暮らわと
何う淋風は移ふ事の久
冬の夜乃と命限あり大
程この歳言を忍れを泉
みさいふ大星舞の大さ
仰まうふ女の髪能吹れり
自祓の昭指買やと
登一産まを憐やと
輜巴
笠翁
和推
再賀
飛舟
夷山
翫鬼
蝸名
古栄

肝魂を泣くはうまれ年首ぬ 玉賜
紫首書人か笑人さる石 水鷗
と波の芦万はえちり跟うふ 百庵
年忘れ羽織の裏小画せりり 乾什
年の内よまゝハ来より飯は蝶 舊室
夕言の滯ある人除初のおり 曲菴
ほごくの尾を振衣のれは外 蕪里
方の上と凡よ吹をせとさ首ぬ 八龜
次乃問て上よは年や年の豆 玉羽

年や本よ金に花なく師をけ 嘿我
二重荷やぬや妻も首をさる 東女
昔とれを梅と虫の鳴るは外 故一
年の矢よ鮫の面もせり外 百洲
昔や師を月よれを清く馬 海山
三ツ子ころは魂やとれは暮 射堂
操より年の控後も四季の履 平洲
表白のうらハ陽のうらハ夜 長英
主曰れ思ふはをやとれは年 万英

あつても 緋衣の妻はあつたり
衣肥はしあもを種りあつし
紋師のまえかきし師をけ
たしや紙幅をさうに柄あり
柄をそと師をよせしを柄のむ
まは清和や梅の香の蒼蒼緑
鎌倉の年の雲路は雲羽の種
廓は梅白あやの布に進
高銀を何とこしとての蘇川
貞寫
素蝶
肖木
一歩
定字
常仙
露自
渭北
紀野

あ本の梅はつれ市に雪
まはまよそふふしてつれあ
まは清和の甲や柄を固
りあも又結納はあふ師をけ
厚一羽をく物買しをけけ
めろ目の人へ長き師をけ
まはあつた楽着つめし年志
惜む自やをみたる柄も大あ白
年よりし先へ忘るも小あ
貴月
水語
金幣
連尺
茶外
墨皮
穴屋
主丸
正足

長季のや脩齋庭のお拍子 育梧
松物産の書やゆしれかを極 玄園
ここのおふと能子あぬ大女日 可容
脩齋の花の名のほく梅子 子璣
黄金の小判をきかゆきうふ 法八
唐うしこよみの枝折むあは花 訥子
ゆし練や門の薄も赤いし 眞貫
掃よせら年の名跡や短の葉 逸我
年とゆる梅拵あや大女日 平砂

賜よとの音響く師をうふ 買明
初高や仰きそよく雄季の夢 仙水
挨拶の因一とこととれ言 雲里
年の尾や取甘艶もあうりり 葉院
明かる控ゆ一おや大女日 徳仲
四五粒のゆしや白口とあはま 程洋
くく玉は視もれとあまき日 龜成
大魚と誇てある師をけ 氏野
かゝるの物よりかてまの波 習三

袈裟のあざむき拂ふやまの言
 人をもとと鷹の累とよまぬ
 〇〇お春や五十文の大井川
 書とよつ梅の貢や清見寺
 手の尾や陰馬屋の鶴の巻走
 新と一や一杖二杖の竹の子流
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 大海を掃くも〇〇〇〇〇〇〇〇
 貴子山の伊勢屋よ輝くて鹿の子

祇登 鄭胤 法宿 芳山 心知 隆平 琳水 竹郎 大梅

松極ま人の名じ師走のふ
 夜松の杉戸小徳る〇〇〇〇
 心よ紀年の吹草れいむすけ
 床もよ居て着とよまぬお春
 自高ふその名跡を情こりり
 おと板と念強や一年のふき
 おと板と念強や一年のふき
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

宗路 黙耕 万川 朴者 鳥石 羽七 琴鶴 佛素 白清

喜行や何ともしと、いふはなも
 更登
 大崎。履物もよく足より
 立園
 浦倉よぬりとの、二松の家
 木氷
 末廣しとし、此尾紙の二松屋
 淡交
 大崎。一寸先、暗てあし
 信序
 悔春や粉の中、ある白嵐
 社嵐
 梅のむ日向、まいたいよや、言ぬ
 立机
 あゝ江戸てあや、やく年のゆきむ
 欠山
 誰の子のゆき、あやや、寄柑露
 存義

松の紫や年と包で、氷面鏡
 二調
 と、信の高ば、若あや、脚世景
 立峰
 姑のうら、知しれて、年言ぬ
 嵐窓
 身信や粉のく、言、漸、行、あ、う
 買雪
 髪結つ、人よ、回、る、し、は、外
 后腸
 流人と、ち、る、や、年、の、ま、ち、屋
 長梢
 早、る、松、こ、お、め、れ、光、る、ゆ、き、は
 萬花
 こと、の、な、ま、れ、く、とも、控、ぬ、ゆ、き、は
 木髪
 弓と、袋、巻、お、あ、り、の、油
 御筵

朝鮮の柳を布くともは外
 行年此礎もかろに樓船
 山人よもよとたうせや年の言
 蝶くのもあつたころも年の布
 くら花の年の言の錦うも
 侍もよもよとたうせや年の言
 年流中興師の廊のむ筏
 斯もや心望もよもよ年下敷
 秋風
 白曉
 宮道
 巻石
 南聖
 尹督
 花来
 存山

延享二年睦月上旬

追加

琴歌ようせいやんや福寿軒
 品玉の枝もつよよの柳をうか
 約はくか子共んやと物の表
 世よ遠き空森もくくく空
 離るくくくハ行に年ノ言
 君く代や柳をれをよ風中
 松竹の塵も交は師をうか
 梅咲や松竹 掃ふ年の言
 玉芝
 全
 者己
 全
 其十
 草也
 香志
 赤羽

